

もう1章つけ加えたかたちで、「子ども支援とは、いったいなにか」、とくに「子ども支援の教育社会学とは、どんなイメージなのか」という疑問に答えてほしかったというものである。

「子ども」を前面に据えた教育社会学から、今度は「子ども支援」を前面に据えた、さらに積極的な教育社会学の構想を、是非ともまとめていただきたい。いわば、『続・子ども支援の教育社会学』である。本書を読み終えたとき、こんな感想をもつのは、おそらく評者だけではないような気がする。

竹内通夫編著

## 『ピアジェの発達理論と幼児教育——ピアジェが、私たちに投げかけたもの——』

(あるむ、1999年)

青井倫子(愛媛大学)

20世紀を代表する心理学者ピアジェ(Jean Piaget, 1896-1980)は、認識論の立場から、大人とは異なる精神的存在としての子ども、そして何より能動的な存在としての子どもに光をあて、教育界にも大きな貢献を果たした。編著者の竹内氏は、教育社会学、幼児教育学がご専門であり、かねてよりわが国における知的早教育の過熱傾向に強い懸念を抱き、胸をいためてこられた。本書において氏は、幼ない子どもたちにかかわる人々がピアジェの発達理論から受けとめるべきメッセージと自らの幼児教育論を語りかける(なお、第6章「ピアジェの発達理論と幼児の美術教育」が共著者加藤氏の論考、その他はすべて竹内氏の執筆である)。

第一部「ピアジェ理論と幼児教育」では、ピアジェの構成主義的考え方や発達段階論を概説したうえで、子どもの自発活動を重視するピアジェの活動教育論を紹介している。また、C. カミイやL. コールバーグらがピアジェ理論から得た教育的示唆や、ピアジェ理論に基づくカリキュラムとその評価、ピアジェ理論に対するH. ワロン、J. プルナーらの批判などが紹介されている。ピアジェにおいて発達とは、ある構造から次の構造への変換を意味する。この変換は、個体と環境との相互作用を通しての構成(同化と調節、及び両者の均衡化)によってもたらされるものであり、均衡化は時間を要し、その時間は一人ひとりが自らの方法で調合するものであるとされる。こうしたピアジェの構成主義的考えに基づき、竹内氏は、知識を教え、発達を急がせたり段階を早めたりするのではなく、各々の発達段階のプロセスを充実させることが重要であると主張する。そして、「子どもたちが本当に理解するのは彼ら自ら創造したものだけで、われわれが何かをあまりに急いで教えようとすると、彼らはそれを自分で消化して自分なりに改めて創造していくことができなくなってしまう」というピアジェの言葉を引用しながら、外から教える(教え込む)ことの弊害を強く戒める。ピアジェは、事物への働きかけこそが知能の構成に決定的な役割を果たすと考え、特に幼児期にお

いては活動を伴わない思考はあり得ないと考えていた。本書において竹内氏が最も強く読者に訴えんとしていることは、幼児に早くから画一的・一斉的指導のもと文字や数を教え込もうとする知的早教育に対しての警鐘となる、こうしたピアジェのメッセージであろう。

第二部「ピアジェの発達理論と私の幼児教育」には、幼児教育に関する竹内氏の12の論考が収められている。そこではたびたび、R.カーソンの「子どもにとっても、大人にとっても、『知る』ことは『感じる』ことの半分の重要ささえも持っていない」という言葉が引用される。教育や科学的探究の原動力として「驚きによって心の窓を開く」ことの重要性を訴え、「教育の目的は、知識の量を増加させることではなく、子どもが発見し、発明する可能性を創り出すことである」と述べたピアジェの言葉に通ずるものを感じておられるのであろう。そして竹内氏は、保育者に求められるのは、心の豊かさと鋭敏な感性—「驚異の感覚」を持ち、それを子どもたちに伝えてやることであると主張する。いずれの論考にも、子どもを能動的な存在と捉え、幼児一人ひとりも「彼ら自身の人生を持つ」という子ども観、発達の実状に即し発達をせかさないと教育観、すなわちピアジェの発達理論から氏が受け取ったメッセージがその根底に在る。子ども、人類、生あるものすべてに対する尊重の念とその未来への祈りにも似た竹内氏の思い、氏のあたたかいお人柄を感じさせられるものばかりである。

わが国においてピアジェ理論とそれに基づく幼児教育に関する類書はほとんどなく、本書は貴重な一冊である。ただ、内容が多岐にわたっているためか、論の深まりや建設的検討に欠ける感は否めなかった。同化と調節の概念を中心に、突っ込んだ論理展開がほしかった。ピアジェ理論とその教育的展開に関する最新の研究動向の書としてよりは、幼い子どもにかかわる人々に幼児期の教育のあり方について再考することを促してくれる一冊と受けとめた。

最後に、幼児教育界に身を置く者として、評者の勝手な要望を述べることをお許しいただきたい。現在のわが国の幼稚園教育は、環境を通しての教育を基本とし、子どもの自発的活動としての遊びを通しての指導を中心としている。しかし、計画的な環境構成のあり方や教師の果たすべき役割が明確でなく、「受容し見守る」だけの保育に陥りがちであるといわれることもしばしばである。ピアジェ理論に基づく幼児教育は、遊びや共同活動を重視する点でわが国の幼児教育の理念に通じるものであるが、十分に計画されたカリキュラムと教師の役割が重視される点で特徴的である。たとえば、第6章「ピアジェの発達理論と幼児の美術教育」で取り上げられているG.フォーマンは、ピアジェの学習理論に描画を取り入れた人物であり、アメリカに「構成的な遊びの学校」を建設している。本書では言及されていないが、アートによる構成主義的学習は、現在世界的に注目を集めているレヅジョ・エミリアの教育実践において中心的な位置を占めるものでもある。自発活動によって知識を徐々に獲得していくというピアジェの発達理論を取り入れたこうしたカリキュラムや実践と、そこにおける教師の役割、保育の評価方法など、より多くの具体的な紹介や著者の方々のご提言を望みたい。今後、認知発達論と遊びの発達論を統合して幼児教育への展開を図るような理論展開により、現在のわが国の幼児教育界にいつそうの示唆を与えていただけることを期待している。